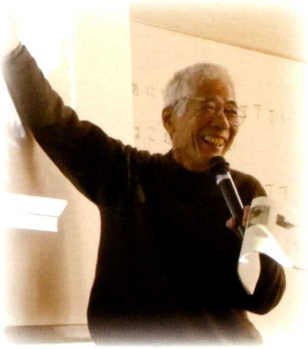
レンガドックかわら版

第9号
2016.4.1

産業遺産と浦賀の歴史と今を伝える広報誌



Contents

02 イベントリポート 1
写真が語る浦賀ドックとまちの記憶

04 イベントリポート 2
浦賀小学校　総合学習との連携

06 連載 うらが今昔⑨
電話とガス

07 連載 ドックのお話⑨
昔、ドックで働いていた方へインタビュー

08 連載
うらうら散歩

浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

レンガドック

レンガ造のドックは日本に２基しか存在しません。もう１つの川間ドックは現在ゲート（扉船）が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。

写真が語る浦賀ドックとまちの記憶

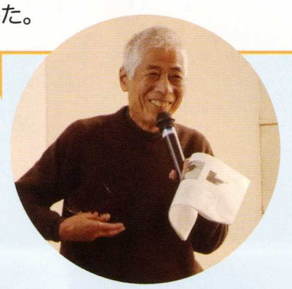
平成27（2015）年12月5日（土）、第46回レンガドック活用イベントを開催しました。今回のイベントは「写真が語る浦賀ドックとまちの記憶」と題し、浦賀ドック操業時の写真をプロジェクターで上映しながら、出演者が当時の町の様子を語りました。パネリストに住友重機械工業㈱OBの道村重信さんと青木秀夫さん、コーディネーターには郷土史家の山本詔一さんをお迎えしました。また、講演会後には、レンガドックの「底」まで降りる見学会をしました。

講 演

昭和29（1954）年　駅伝大会

●この写真は駅伝大会の時のものです。この時のコースは公道を使用していて、大津～久里浜～西浦賀を経由して、浦賀に戻ってくるものだったと思います。

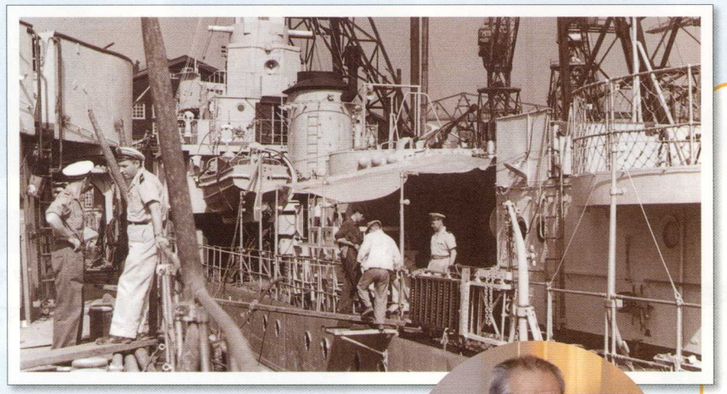
●近所の人やOBなどが応援に来てくれて、沿道が観客でいっぱいになりました。



道村　重信さん

山本　詔一さん

●地元住民にもこの駅伝はずいぶん人気がありました。まだ自動車の少ない時代にトラックが伴走しているのを見て、「この会社はすごいなぁ」と思ったのを覚えています。



昭和30（1955）年　フランス極東海軍艦艇造修工事

●この写真は、フランス海軍の艦船が修理のため寄港した時のものです。ベレー帽をかぶったフランス人は、何とも言えず格好良かったです。

●私と同じく浦賀ドックに勤めていた兄が、「フランスの人たちがミカン山のグランドでボールを蹴って遊んでいる。何が面白いのかわからない」と話していたのを覚えています。当時の日本ではまだ有名でなかったサッカーをしていたのですね。

青木　秀夫さん

昭和27（1952）年　645番船アンドリウディロン号進水式

●この写真は、アンドリウディロン号進水式のものです。

●10万トンを超える船を進水させると、浦賀湾に大きな波が起こります。私が子どもの頃は、その波を楽しみに進水式を見学したくらいです。

●ある船の進水時、波で流された人を見たことがあります。「そこにいたら危ないですよ」と声をかけていたのですが、何が危険か分からなかったのでしょう。進水時にはたくさんの警備船が出ているので、すぐに助けられていました。

昭和30（1955）年ごろ　浦賀工場東岸壁

●手前から2列目で3隻並んでいるのは、捕鯨船（キャッチャーボート）といいます。

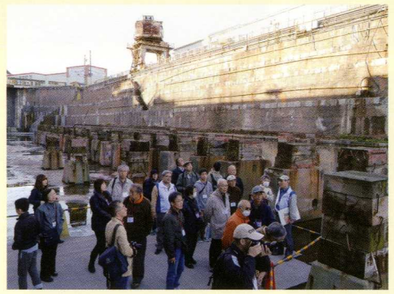
●商業捕鯨が行われていた昭和30年代は、漁から帰ってきたキャッチャーボートが、修理のためたくさん浦賀へ来ました。

●修理を担当していた仲間の話では、乗組員から“お土産”として鯨肉がもらえたそうです。

産業遺産見学会

講演会の後は、レンガドックと機関工場をまわる産業遺産見学会です。今回はドックの「底」まで降りました。

参加者の皆さんは、「底」から見上げるレンガドックの大きさに圧倒されている様子でした。



当日の詳しい内容を『レンガドック活用イベントブックレット4』にまとめています。市内の各図書館、コミュニティセンターでご覧になれます。

浦賀小学校 総合学習との連携

浦賀小学校の3年生は、「総合学習」の授業において、自らのまちの浦賀について1年間にわたり学習しています。第45回レンガドック活用イベントでは、浦賀小学校と連携し、総合学習の一環として「浦賀ドックとまちに関する講義」、「ドックの見学」、「造船技術を使った工作体験」を行いました。

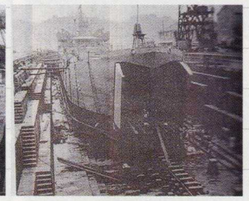
講　義

平成27(2015)年10月28日(水)、浦賀のまちや造船などに関する講義を行いました。講師は、郷土史家の山本詔一さんと住友重機械工業(株)横須賀製造所の鈴木治さんです。

山本　詔一さん

<少し前の浦賀ドックと町のようす>

- 今から50年ほど前は、約4000人が浦賀ドックで働いていました。そのため、朝の通勤時間には、浦賀ドック側の歩道は人であふれていました。
- 私が小学生のころは、工場で作業する音が教室まで聞こえました。授業が聞こえなくなるほどの大きさでしたが、そのころクラスの約4分の3の保護者が浦賀ドックで働いていたので、誰も文句を言いませんでした。



写真左:
浦賀駅から工場への通勤
昭和50(1975)年ごろ
横須賀市市史編さん室

写真右:
LST(輸送艦)の修理風景
昭和32(1957)年

<浦賀の造船といま会社でつくっているもの>

- 明治30 (1897) 年に浦賀船渠(せんきょ)という会社がつくられ、浦賀での造船が始まりました。平成15 (2003) 年の工場閉鎖までの間、自衛隊の船やタンカーなど1000隻以上を造ってきました。
- その中で有名な船のひとつに、日本初の純国産大型帆船の「帆船日本丸」があります。
- 昭和46 (1971) 年、追浜に新しい造船所ができました。現在、そこでは船だけでなく、精密機械や飛行機のエンジンに使う精密部品などを造っています。

横須賀製造所（追浜工場）全景

帆船日本丸

鈴木　治さん

質疑応答

Q. 船の材料はどのようなものがありますか?

A. 鉄が材料の大半です。船はほとんど鉄の塊だと思ってください。

Q. 船をつくる時に大変なことは何ですか?

A. 船は大きなものなので、形を考える人や材料を運ぶ人、溶接する人など、たくさんの人がかかわります。みんなで力を合わせて協力することが大変です。

Q. 関東大震災で浦賀に大きな被害があったと勉強しましたが、浦賀工場はどうでしたか?

A. 大きな火事があり、大きな建物はすべて壊れてしまいました。ですが、レンガでできたドックは壊れませんでした。

Q. 浦賀ドックではどんな船が修理されましたか?

A. 浦賀で造られた船が多かったです。船を造った人はその船がどんな風にできているか知っているので、修理しやすかったからです。

ドックの見学と工作体験

講義で浦賀ドックや造船について勉強した生徒の皆さんは、11月5日(木)にドックの見学と造船技術を使った工作体験を行いました。ドックの見学では、「浦賀ドックは日本に2基しかないレンガ造のドックの1基」の説明に驚いた様子でした。工作体験では、ネジ切りで文鎮を作りました。

学習の成果は、班別の「新聞」になりました!!

「講義」、「質疑応答」の詳しい内容を『レンガドック活用イベントブックレット4』にまとめています。市内の各図書館、コミュニティセンターでご覧になれます。

うらが今昔 9

電話とガス

郷土史家　山本詔一

■電話の開通

明治40（1907）年6月、浦賀に電話が開通した。明治23（1890）年12月に東京と横浜で開通して以降、大都市を中心に普及した電話であったが、地方都市に普及するにはそれなりの時間を要した。当時の浦賀の電話は、浦賀郵便局内で通話事務をしていた。そのため、通話のたびに郵便局に出向くか、「呼出券」の配達を待って郵便局へ行かねばならず、現在の私たちには想像もつかないほど不便なものであった。

このような状況に対して、明治41（1908）年2月、浦賀船渠や浦賀町役場、浦賀銀行などの有力者23人が、連名で特設電話の開設を逓信大臣に申請した。特設電話とは、電話開設に必要な設備の設置・維持にかかる費用を架設希望者が負担することを条件として、国が電話を開設するものである。浦賀においては、浦賀郵便局の増設費用と横浜局の備品費用782円を架設希望者で分担することが必要だった。これを23人で分担すると1人あたり34円余りになる。もりそばが一杯3銭の当時、浦賀の人々がどれほど電話を必要としていたかを垣間見ることができる。同年の8月に認可がおり、電話加入者は他の都市と直接通話ができるようになった。

大正4（1915）年12月に出版された『浦賀案内記』に、出版に協賛した方の広告が掲載されている。これを見ると、当時の電話番号を知ることができる。浦賀船渠の電話は、4番・25番・37番と、川間分工場の39番・40番の合計5本となっている。他には、初代の浦賀町長を務めた三次商店（江戸屋）が10番、浦賀銀行の後をついだ関東銀行浦賀支店が7番、江戸時代に東浦賀の干鰯問屋の雄であった宮原屋与右衛門が13番、浦賀の名物水飴の製造販売をしていた和泉屋芳春軒が18番、浦賀一の割烹旅館徳田屋が20番となっている。

電気は、明治43（1910）年12月の供給開始時、浦賀で300灯余りであった。これが大正4（1915）年には、4000灯余りになるほど急速に普及した。これと比較して、電話普及のテンポが遅いことが分かる。

■ガスの開通

大正2（1913）年8月、浦賀町の有志が資本金5万円で浦賀瓦斯を設立した。社長には三浦郡長を永年務めた小川茂周氏の息子の小川織曹氏が就任した。大正3（1914）年4月に築地古町（現在の住友重機械工業浦賀工場内）に施設・社屋が建設され、営業を開始した。しかしながら、営業開始時にガスの供給をうけた家は340戸余りにとどまり、早くも同5年には営業不振に陥った。そのため、当時、浦賀船渠の社長であった町田豊千代氏のあっせんで浦賀瓦斯は整理解散し、あらためて同6年3月に同氏を社長にした浦賀瓦斯製造が設立された。以後、浦賀瓦斯は船渠の社長が兼任することが慣例となった。浦賀瓦斯の大口需要者は浦賀船渠であったが、ガス会社も女子職員を雇って需要者の増加に努め、需要者は大正7（1918）年には428戸にまでなった。以降、浦賀瓦斯製造は、昭和20（1945）年10月に東京瓦斯により吸収されるまで営業を続けた。

「浦賀案内記」大正4（1915）年12月信濃屋書店発行

ドックのお話⑨

昔、ドックで働いていた方へインタビュー

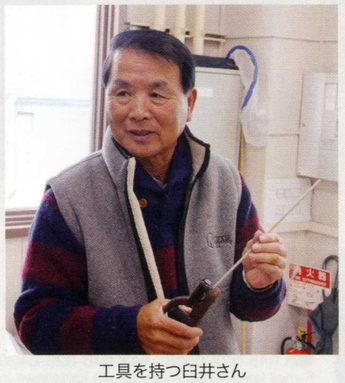
臼井 正吉さん

前号では、切断・加工した部材を組み立てる「小組立」について紹介しました。小組立でも仮留めの溶接を行いますが、高度な技術が必要とされる溶接などは、「溶接屋」と呼ばれる溶接専門の担当者が行います。今号では「溶接屋」の仕事内容などについて、臼井正吉さんにお話をお伺いしました。

――入社以降の経歴を教えてください

昭和29（1954）年に浦賀中学校を卒業し、同年に養成校※へ入学しました。同期は約40人いて、鋼材を加工して船を形作る「造船部」と、船のエンジンなどを造る「造機部」にそれぞれ半数ずつ配属されました。私の兄が浦賀ドックでエンジンの製造に携わっていたことから、兄と同じような業務に就きたいとどこかで思っていました。ですが、入学時に行う適性検査の結果によって、溶接への配属が決まりました。そこからは退社まで溶接一筋です。現場での作業だけでなく、高卒社員の指導や、協力会社作業員の技量のテスト、作業の自動化や新たな素材の溶接といった技術を開発する業務にも携わりました。

※養成校…正式名称は浦賀造船所技能者養成所という。3年制の学校で、一般教養と応用力学などの専門的な授業と、現場での実習を行う。


工具を持つ臼井さん

――溶接ではどのようなことをするのですか？

簡単に言うと、つなぎ合わせたい部材同士を溶かして一体化させることです。溶接が造船に導入されたのは昭和25（1950）年ごろからで、私が入社した頃はリベット接合※がまだ行われていました。溶接はリベット接合と比較して、鋼材の使用量が少なく、作業のスピードが早いといったメリットがあるので、本格的な導入に向けてどこの造船所も力を入れていました。昭和30年代前半に溶接技術が大きく進歩した結果、昭和35（1960）年ごろにはリベット接合は行われなくなったと思います。

※リベット接合…つなぎ合わせたい部材の穴を合わせてリベットと呼ばれる鋲をはめ、機械でリベットを打って潰して留めるもの。

――溶接の作業で印象に残っていることは何ですか？

技量の個人差がとても大きいことです。技術の上手い下手は溶接の形状を見ればすぐに分かります。特に上手い人の溶接は、形状が鱗のように1つ1つはっきりと残ります。そのため、職場は自らの技量を競い合う雰囲気にありました。溶接屋はプライドが高かったのだと思います。私を含めて8人いた溶接屋の同期は、仲間でありながらもライバルでした。「外板」と呼ばれる、船の外側になる部材は、船で最も大切なもののひとつです。溶接後はX線による検査も行われることから、特に技量が高い者しか担当できません。養成校3年生の時に初めて外板を担当させてもらったのですが、それが同期よりも早い時期で嬉しかったのを覚えています。昭和39（1964）年に溶接棒メーカーが主催した全日本溶接コンクールには、浦賀ドック代表として出場する機会をいただきました。コンクールでは手が震えるほど緊張しましたが、優勝することができました。

――仕事の息抜きで行っていたことなどありますか？

私は養成校時代からバレーボール部に入っていました。大会において養成校は高校として扱われるので、市内の高校と対戦したこともあります。養成校を卒業して、実業団で活動するようになってからは、全国大会にも出場したことがあります。工場内には広々と練習できるスペースはありませんでしたが、昼休みと定時後は欠かさず練習していました。定時後の練習は、外が暗くなってボールが見えなくなるまで続きました。当時は今ほど娯楽が無かったので、仲間と練習に没頭できたのでしょうね。

うらうら散歩 その7

浦賀駅を降りて、県道を浦賀警察署方面に2分ほど進むと、食堂「九州屋」があります。店主の上村繁さんに、お店の成り立ちや浦賀ドックとの関わりなどのお話をお聞きしました。

上村　繁さん

昭和13年創業

昭和13(1938)年、上村さんのお父さんが創業した九州屋。お父さんは出身地の九州から上京し、横須賀中央の割烹料亭で修業した後、独立しました。創業地が浦賀となった理由は、市内で有数の大企業である浦賀船渠のある浦賀には、多くのお客さまがいると思ったのでは、とのこと。

第二次世界大戦中は疎開していたため、営業ができなかったそうですが、終戦をきっかけに営業を再開しました。今でこそ食堂としてのイメージが強い九州屋ですが、今川焼きやアイスキャンディーなどの甘味を販売していたこともありました。ドックの定時である16時に合わせて、今川焼きを作っていましたが、16時を少しでも過ぎるとドックの従業員が列を作って待っていたそうです。アイスキャンディーはお店に製造機を導入して作っていました。製造機がまだ珍しい時代は、不具合が起きるとお父さんが何日も徹夜して修理をしていたそうです。上村さん自身も、できあがったアイスキャンディーを特注のクーラーボックスに入れて、ドックの従業員や地域のお祭りの場へ配達しました。

浦賀ドックへの出前

昭和26(1951)年ごろからは、浦賀ドックへ食事の出前を始めました。人気メニューは、カレー・そば・かつ丼といった簡単に食べられるものだったとのこと。「ドックのお昼休みが始まる12時になると、工場内に入ることができます。そこから注文をいただいた各課を回ります。工員の皆さんがお腹を空かせて待っているので、配達は1分1秒の勝負でした。配達が遅れると、お店に催促の電話がかかってくることがあり、午前中のお店はとても忙しかったです」と、当時を懐かしそうに語る上村さん。出前はお昼に限らず、夕方以降でも受けていたそうです。夕方以降に注文するのは残業をしている方が中心で、カレーを何段にも積んで、自転車で配達していたそうです。取材中、過去のかわら版にある何人かの住重OBの写真をお見せしたところ、「この方は○○課にいませんでしたか?出前したのを覚えていますよ」と、当時の様子を楽しそうにお話いただきました。

進水式は書き入れ時

見学客も含めて多くの人がドックへやってくる進水式は、お店が最も繁盛する日の1つでした。お店が大変忙しかったため、ずっと浦賀に住んでいながらも、進水式は1、2回しか見たことがないとのこと。進水式の中でも特に印象的だったのは昭和59(1984)年の帆船日本丸のもの。といっても、式典自体を見学したのではなく、いつもより多くのお客さまでお店が大繁盛したことが印象的だったそうです。

今では鮮魚が目玉の九州屋。中でも自慢のアジは、弟さんが走水で釣ってくるそうです。市外の方からアジの入荷状況を尋ねる電話がかかってくることも。今でもお店はたくさんの人に愛され続けています。

イベント情報

第47回レンガドック活用イベント 咸臨丸フェスティバルに参画　2016年4月30日(土)【入場自由】

①ワンデーミュージアム
時間:10:00〜16:00
場所:(仮称)ミュージアム・パーク推進センター
内容:・浦賀ドックパネル展示
・咸臨丸パネル展示
・咸臨丸子孫の会と語らう場　など

②産業遺産見学会
時間:第1回　13:00〜13:50
第2回　14:30〜15:20
場所:レンガドック周辺

③産業遺産でコンサート
時間:13:45〜16:00(予定)
場所:機関工場内
内容:浦賀中学校吹奏楽部、三浦学苑高校吹奏楽部

④浦賀ギャラリー
時間:10:00〜16:00
場所:機関工場内

●本誌『レンガドックかわら版』は、浦賀行政センターなどに置いてあります。

ご意見、ご感想もお待ちしています!

発行　レンガドック活用イベント実行委員会
お問い合わせ　レンガドック活用イベント実行委員会事務局
(横須賀市 都市部 市街地整備景観課内)
〒238-8550 横須賀市小川町11
電話 046-822-8526　FAX 046-826-0420
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp